

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成21年3月18日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 情報学研究科社会情報学専攻

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 阪 本 真由美

事業区分	平成20年度・短期派遣助成		
研究課題名	インドネシアの津波災害被災地における災害観の形成と避難行動		
受入機関	国立ジャクアラ大学		
渡航期間	平成20年12月15日 ~ 平成21年1月6日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	330,000円	
	使用した助成金額	330,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	航空券(大阪~ジャカルタ)	184,240
		航空券(ジャカルタ~バンダ・アチエ)	57,498
		宿泊費(21泊)	130,000
		上記金額に充当	

インドネシアの津波災害被災地における災害観の形成と避難行動に関する研究

成果の概要

京都大学大学院情報学研究科社会情報学専攻博士後期課程

阪本真由美

1 研究の概要

2004年12月26日に、バンダ・アチェ南東250キロを震源とするマグニチュード9.1の地震が発生した。地震発生から約30分後に、この地震による津波が、インドネシア・スマトラ島の北端に位置するナングロ・アチェ・ダルサラーム州の州都バンダ・アチェを襲った。被災前のバンダ・アチェは人口約26万人の中規模都市であったが、この津波による死者・行方不明者は71474人にのぼり、人口の27%を失う大惨事となった。

一般に、防災対策は、地震、火山、津波などの自然外力（ハザード）の発生メカニズムを明らかにしたうえで、想定したハザードによりもたらされる被害を防ぐ、あるいは被害を軽減させるというように自然科学の知見に基づくものとなっている。ところが、すべての地域の人々が、自然災害を自然科学現象として捉えているわけではない。なかには、地震や津波のように突如として発生する災害を、天災や前世からの因縁などと捉えている人がいる。このような人は、日常の行いを改善する、あるいは、信仰を深めることにより、災害による被害を防ぐことができると考えている。自然災害の捉え方や、災害に直面した際の対応行動は、過去の被災経験、教育の有無、ハザードの規模・頻度・可視性などの特質、地域の社会・文化的価値などの文化的要因、社会・経済的要因などの影響を受けており、地域により異なるものである。従って防災対策を実施する際には、まずは、その地域性を理解しなければならない。

本研究は、バンダ・アチェを事例に、災害に関する知識を持たない人々が、突然の災害に直面しどのように対応したのか、被災経験を踏まえ災害をどのように捉えているのかを把握することを目的としている。

2 調査方法

人々の災害に対する基本的意識である災害観とはどのような概念であろうか。廣井脩は、地震が起こる可能性が高いにも関わらず対策をしない人や、警報が出されても避難しない人の根底にある意識を、関東大震災を始めとする過去の文献から分析し、日本人独特の災害観として「天譴論」「運命論」「精神論」の三つを挙げているⁱ。これらの災害観の概要は以下の通りである。

- ・天譴論：天が人間を罰するために災害を起こす。
- ・運命論：自然のもたらす災害やそこにおける人間の生死を避けられない運命と考え甘受

する思想。

・精神論：人間の精神や心構えを強調する。

これらの災害観の対極には、災害は自然現象であり科学技術によりこれを克服できるという「科学的災害観」があり、現代社会では科学的災害観を多くの人が受け入れていると述べている。科学技術の進歩とともに災害観は変化すると考えられるが、それにも関わらず日本人の深層意識にはこのような固有の災害観が潜在的に存在している。

それでは、バンダ・アチェで津波に被災した人々は被災経験をどのように捉えているのであろうか。過去に日本で実施された災害観の調査事例を参考に、2007年に調査を実施したところii、災害が発生した原因を「津波は神の試練(cobaan)である」とする回答が最も多くみられ、さらに、天譴論に対して強い共感がみられた。「試練」という言葉の解釈を詳細に聞いたところ「神の懲らしめ」という解釈と「神の懲らしめではない」という解釈に分かれた。一方、再び津波災害が起こると考えているのか、という災害の周期性に関する質問については、全体的に共感度は高くなかった。このことから、インドネシアの人々は、科学的災害観とは異なり、より天譴論に近い災害観を持っていると考えられたが、これが何に起因するものなのか、また、それが災害対応行動にはどのような影響を及ぼしたのかは明らかではなかった。

そこで、本研究においては、被災者に対してインタビューを行い、被災時の行動を再現してもらうとともに、その語りの内容から、再度災害観を分析してみることにした。調査対象者は、災害前から地域に居住しており、かつ、津波により人的・物的被害を被った人とした。被災地では、津波災害後、住宅の再建が進められているが、死亡あるいは行方不明となった被災者の遺族が居住しているケースも多いため、調査対象地域の住宅を訪問し、被災前から居住しているか否かを確認したうえでインタビューを実施した。インタビューについては、時間が基軸となることから、地震や津波が発生した際には何をしていたのかを起点として、その後、どのような行動をとったのかを、地震発生時、津波発生時、津波来襲時、津波が引いた後、津波から数日後というように時間軸に沿って話をしてもらった。調査対象地域は、津波により人口の7割を失ったクタラジャ地区ムルドゥアティとした。調査は、インドネシア人の調査員(国立シャクアラ大学の学生)と調査者との2名で行い、基本的にインドネシア人調査員が、すべてのインタビューを回答者の使う言葉に応じインドネシア語もしくはアチェ語で行った。

3 調査結果

調査の結果、災害発生時に何が起こったのかを把握できておらず、非常に混乱した状況であったことが明らかになった。インタビューから明らかになった被災者の行動を以下に整理しておく。

地震発生時に、外出中だった人は、自宅が揺れにより被害を受けていないか気になり、帰宅しようとした。人々が自宅へ向かう途中、あるいは、自宅に着いた途端、今度は、海が

ら市内へ津波が遡上し、海側にいた人が市中に向かい走り始めた。この結果、市中心部から海側にある住宅へ向かって走る人、海から市中心部へと向かって走る人で調査地域は大混乱となっていた。

津波来襲時、人々は押し寄せた波を津波とは認識しておらず、津波は「水」という言葉で表わされていた。なかには、津波を、地域が例年経験する災害である、洪水と解釈している人もいた。津波来襲時には、津波を実際に目で見た後に行動する、あるいは、周囲の人の行動を見て行動するというように、災害の可視性が影響を及ぼしていた。避難方法は、住宅の二階に避難する、もしくは、走って逃げるといったものであり、いずれも瞬時の直観に基づき行動していた。走って逃げた人は、どこへ向って走ればよいのか分からぬまま、周囲の人々の情報を頼りに走った。走っている最中に津波に巻き込まれた人もいたが、流れ着いた後も走り続けていた。一方、二階に避難した人は、自分の家、他人の家を問わず避難していた。

津波が引いた後、沿岸部の建物がことごとく破壊されており、市中心部にあるグラン・モスクが遠くからも見えたこともあり、多くの人々がグラン・モスクに向かった。人々は、グラン・モスクを拠点に家族の安否に関する情報を得ようとした。ただし、体系だった生存者情報収集・伝達のシステムがあったわけではなく、情報は漠然と人伝いに伝えられるものであった。

津波災害から数日が経過した後も、人々は、行方不明の家族を探し被災地を歩きまわっていた。地震災害とは異なり、津波災害では遺体が流されてしまう。特定の遺体の収容場所なども決まっておらず、モスクに運ばれた遺体もあったものの、身元不明の遺体の多くは流された場所にそのまま放置された。このため、人々は家族を探し求めあちらこちらと歩きまわっていた。津波から数カ月後に支援により、テントや住宅を得てようやくムルドゥアティに戻った。

4 災害観に関する考察

2007年に実施した調査においては、被災者の多くが災害を「神の試練」と捉えていることが明らかになったが、これは今回実施した、災害対応行動に関するインタビューにおいては確認できなかった。

もともと、アチェはインドネシアで最初にイスラム教が伝わったイスラム教信仰が深い地域である。これに加え、津波災害後、人々はまずモスクに向かい、モスクを起点に復興の第一歩を踏み出していたことが明らかになった。

宗教と津波の関係は、津波遺物にもみられる。被災日の12月26日に行われた、追悼式典に参加した。式典は、津波により全壊したムラクサ病院前の集団墓地、市郊外にある集団墓地を中心に開催されていた。ムラクサ病院内部には男性が、そのまわりには女性が集まり、津波により亡くなった人を悼み、大勢の人々が祈りを捧げていた。つまり、被災した病院、つまり津波遺物がモスクと同等の位置づけとして使われていたわけである。この点

についても、宗教と災害を結び付けている。

津波災害後の 2006 年 7 月 11 日に新アチェ自治法が採択された際に、イスラム法（シャリア法）が復活し、制度的にもイスラム教が強化される傾向にある。イスラム（シャリア）警察が、イスラム法に基づく服装をしていない人や未婚カップルの外出などを取り締まるようになっており、住民間にも互いを監視する風潮がみられる。これらの現象はいずれも津波災害前にはみられなかったという話である。

以上のことから、津波を「神の試練」とする考え方は、津波災害後に定着したものだと考えられる。復興過程において、被災経験を「神の試練」と捉え、宗教に対する信仰を深めることが人々の精神的な支えになっていた。ただし、津波災害を宗教的な側面のみならず、自然科学的側面から津波発生メカニズムに対する理解を促進するという取り組みは引き続き必要であろう。インタビューにおいては、「一度試練を受けた人は、二度は試練にあわない」というように、津波災害を宗教的な意味のみから解釈している人がいた。災害に対する正しい理解のもと災害観を形成していく必要があるだろう。

ⁱ 廣井脩（1986）：『災害と日本人—巨大地震の社会心理—』時事通信社，pp.275

ⁱⁱ 阪本真由美、河田恵昭（2008）：『開発途上国の防災事業に対する国際支援事例研究—インドネシアの被災地域の災害観を踏まえた支援に関する考察—』、京都大学防災研究所年報、pp197-204